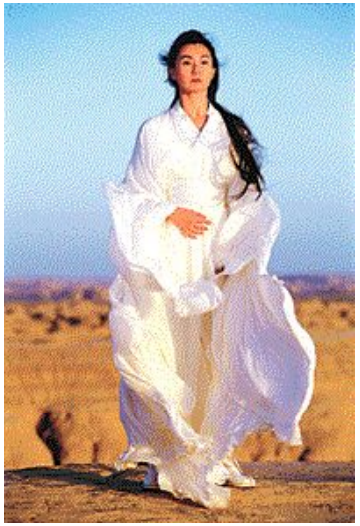
茜色の歌姫

第二部　大化の改新変



多武峰縁起絵巻

戊是歳、太子、奏請して曰さく、「冀はくば倭の京に遷らむ」とまうす。天皇、許したまはず。皇太子、乃ち皇祖母尊・間人皇后を奉り、併せて皇弟を率いて、往きて倭飛鳥河辺宮に居します。時に、公卿太夫百官の人等、皆随ひて遷る。是に由りて、天皇、恨みて国位を捨りたまはむと欲して、宮を山崎に造らしたまふ。

（『日本書紀』巻第二十五）

額田王、近江天皇を思ひて作る歌

君待つと　我が恋ひ居れば　我が宿の
簾動かし秋の風吹く

（『万葉集』第四巻）

第二章　有馬の湯　650～652

有馬の湯は、王都難波より西北に五十里（約25キロメートル）、摂津の深い山中にある。

樹々に挟まれた細い道を昇ってゆくと、視界が開け、岩場となる。岩の窪みや裂け目から湯が噴き出し、身を浸すと病や傷に効く。

近在の豪族や民には知られた湯場であったが、突然、岩場の一隅に家が建てられ、標縄が張り巡らされ、出入りが禁じられたのは、大化と年号が改まった年であった。標縄の外には、苫屋が建てられ、兵が三名、常に詰めており、近づけば誰何され、矛を突きつけられた。

あの家には誰が住むぞ？

有馬のひとびとは囁き合い、さまざまな噂が流れた。四年、五年と歳月が流れたが、民どもは誰も、家に住まう主を見た者はない。

すなわち、その家に幽閉されているのが、板蓋宮において、腹に宿した子の父である蘇我鞍作を、己が子である葛城皇子の手で討たれ、むざんに切り刻まれる様を眼にし、その場で流産し、廃れ人となった先の大王、宝皇女であることを、誰も知らなかった。

宝皇女は、口も聞かず、笑みもせず、泣きもせず、ただ、息をしていた。晴れた日は一日、庭に坐し、雨が降れば屋の内に坐し、時折湯に浸かり、夜になれば寝る。

皇女の側には、一人の女嬬のみが付けられた。いまだ二十歳を迎える前に、宝皇女とともに、深い山の中に置き去りにされた。十歩（約17メートル）四方の家は、有馬宮と名付けられたが、女嬬は外へ出ることも許されず、蕾のまま、花が開こうとする裡なる衝動を、抑えかねていた。

春の暖かな日。

四十を迎え、かつての豊満な四肢が見る影もなく痩せさらばえた皇女は、外から見えぬよう高い樹に覆われた庭で、竹を編んだ床几に横たわり、惚けた面差しで宙を見つめているばかりであった。

女嬬は、水の入った椀を、床几の傍らに置いた。かつての大王は、女嬬をも水をも見ようともせず、唇を半ば明けたまま動かない。

このまま死ねば……。女嬬の瞳が、険しく光った。吾は、外に出られる。

女嬬は、不意に首にかけた巾を外し、庭に穿たれた小さな池に浸した。水に濡れた巾を、宝皇女の貌の真上に拡げた。そのままかぶせれば、息はできなくなるはず……。

ふと、宝皇女の唇がわずかに動いた。笑んでいるかのようだった。

女嬬の貌が蒼ざめ、後ずさりし、そのまま庭を駈け出た。

もしや、正気に戻ったのか？

吾が、皇女を殺そうとしたのを、悟ったのか？

このまま皇女が正気に戻ってしまえば、吾は大逆の罪人……。

恐怖に包まれ、宮の門をくぐり出で、やふくらはぎを傷つけながら、女嬬は岩場を駆け下りた。

「いずくへ！」

見張りの苫屋から一人の兵が飛び出し、大手を拡げた。女嬬は、その股間を蹴り上げた。兵は呻き、うずくまった。

「如何した！」

二人の兵が、矛を手に飛び出した。逃げようとする女嬬の裳裾に、矛が突き立てられた。なおも駈けようとした女嬬はうつぶせに倒れ、裳が裂け、白い肌が露わになった。

二人の兵は息を呑んだ。彼等もまた、女を見ることもなく、苫屋を動けぬ日を送っていた。白くふくよかな女の肌を前に、兵どもは役目を忘れた。

兵庫県神戸市有馬町

一人の兵が、女嬬に覆い被さった。悲鳴が轟いた。女嬬ではなかった。女嬬は咄嗟に兵のふぐりを掴んでひねりあげていた。

兵は女嬬を突き飛ばし、両手で股間を押さえ、岩場を転がって泣き喚いた。

「汝はぁ！」

残る兵が、矛の柄で女嬬の貌を殴った。硬い樫の柄で撃たれ、女嬬は仰向けに倒れ、動かなくなった。

兵は慌ただしく袴の紐を外し、そそり立つ陽物を露わにした。息も荒く、女嬬を見おろした。豊かな胸乳が、裳の裂け目から覗いていた。女嬬に覆い被さった兵は、背後から忍び寄る跫音に気づかぬほど、気が高ぶっていた。

不意に、兵は半身を仰け反らせた。突き出した尻に深々と、剣が刺さっていた。剣の塚を握っていたのは、髪を結い上げて後頭部で垂らし、袴をつけた二十歳過ぎの女。

安見娘だった。

眉ひとつ動かさず、絶命した兵の尻から剣を引き抜き、ふぐりを捻られて悶絶する兵の胸に足を乗せて押さえつけ、喉を掻ききった。

一人残った兵は、恐怖に貌を引きつらせ、しきりに額ずき、命乞いをしていた。最初に、女孺に股間を蹴られた兵であった。

「汝は、この乙女を姦そうとしなかった」

安見娘は、冷ややかな眼差しで言った。

「また、汝が死ねば、有馬宮の見張りがいなくなる。それも不都合」

まず、二人の屍を埋めよ。このこと、誰にも語るな、語れば……。先まで聞かず、兵は弾かれたように立ち上がり、屍を担いだ。

安見娘は、気を失った女孺を抱き上げた。丈の高い安見娘は、小柄な女孺を軽々と運び、湯の沸き煙る岩場の裂け目へと歩んだ。

裳を逃がせ、傷口を丁寧に湯で浄め、さらに、躯のあらゆる部分を洗った。しなやかな指が、撫でるように、剥き出しとなった女孺の躯を這った。胸乳や陰、敏感な箇所をまさぐられ、女孺は夢うつつのうちに喘ぎ、身をよじらせ、やがて、安見娘にしがみついた。

「汝は」

安見娘は、うっすらと瞼を開け始めた女孺の貌を覗き込んで囁いた。

「未通女か」

吾に返り、眼を大きく見開いた女孺の唇を、安見娘は己が唇で塞いだ。

その夜。

有馬の宮の寝屋は、安見娘と女孺――その名を、由良と言った――の専有するところとなった。宝大王は、寝屋の隣の厨に、粗末な筵ひとつを掛けられて、寝入った。

初めての快楽を与えた安見娘に、由良は夢中で抱きついた。安見娘がしたことを真似、胸乳や陰や足指を不器用に舐めた。

――汝が親は？

快が果てて後に問うと、由良は安見娘の肩に貌をもたせかけ、眼差しを伏せて、小さな声で親の名を告げた。板蓋宮で蘇我鞍作が討たれた後、甘樫丘で討伐軍の矛に倒れた蘇我の支族の娘であるらしい。

逆賊の娘故に、狂える宝大王とともに、山中の狭い宮に閉じ込められた。ぽつぽつと語る由良を、安見娘は哀れみではなく、冷え冷えとした眼で見つめていた。

――汝は……。

安見娘は、由良の喉のあたりを柔らかく撫でつつ問うた。

――外へ出たいか。

――出たい……。

しかし、外へ出たとて、頼って行く所もない、と呟く由良の胸のあたりに指を這わせつつ、安

見娘は言った。
「さらば、吾等が邑へ行け」
「邑……」
喘ぎつつ、由良は問うた。
「いずくの邑……?」
「三輪の箸墓」
安見娘は応えた。
「明日、迎えが来る」

翌日、別れを悲しみ泣きじゃくる由良を、箸墓から来た二人の土蜘蛛が、伴い去った。独り、有馬宮に残った安見娘は、厨の土間に座り、虚ろな眼で天井を見つめる宝皇女に対峙した。
裳をはだけさせ、張りを失いかけた胸乳を露わにし、乳首を唇に含んだ。皇女が、わずかに躯を振るわせた。
「目覚めよ」
舌を使い、指を使い、次第に快楽に震え始めた皇女を見おろしつつ、安見娘は呟いた。
「先の大王」

夏が過ぎ、山の紅葉の栄える季節となった。
朝、見張りの苫屋に、ただ独り不聊をかこっていた兵は、不意の安見娘の訪ないに驚き、総身

を強張らせて立ち上がった。
「汝は」
眼の前で二人、無造作に仲間を殺されるのを見ているだけに、兵は唇を振るわせ、次の言葉を待った。
「山鳥を捕れるか」
安見娘の問いに、兵は虚を突かれ、咄嗟に応えが出なかった。
「汝が捕れずともよい。里の者に頼むかして、山鳥を一羽、手に入れよ」
しかし……と兵は、戸惑った面持ちで問おうとした。この苫屋を離れるのは許されていない。
「逃げはしない」
安見娘は、兵の心を見抜いたように言った。
「米の粥と塩だけでは、精がつかぬ」
宝皇女に供されるのは、里の者が運んでくる米と塩だけであった。後は、庭で摘んだ菜を粥に混ぜるくらいである。
「疾う行け」
鋭く発せられた言葉に、兵は弾かれたように、苫屋を走り出た。
安見娘は、振り返りもせず、宮へと岩場を登った。

日暮れ時になって、兵は手に山鳥を提げて戻ってきた。おそるおそる、宮の門前に山鳥を置く。門をくぐって宮の裡に入ることは許されていない。

兵が足早に去るのを確かめ、安見娘は山鳥を拾い上げ、炊屋に入った。器用に羽をむしり、肉をさばき、粥を煮る土器に入れた。

粥が煮え上がり、安見娘は湯気をたてる米と山鳥の肉を木の椀に移し、膳に乗せて、宝皇女の屋に運んだ。

皇女は、虚ろに庭をながめていたが、粥を運んできた安見娘を認めるや、躯の向きを変えた。眼が輝き、笑みが貌じゅうに拡がる。

「先の大王よ」

安見娘は、皇女の唇に己が唇を重ねた。皇女は両手を伸ばし、安見娘の肩に抱きついた。安見娘は、童のようにすがりつく皇女の口元に、木の匙で粥を救って運んだ。皇女は、粥を啜り、嬉しげに笑んだ。

「精をつけたまえ」

安見娘は、皇女の胸に手を差し入れ、乳首を弄んだ。かつて瓜のように実っていた胸乳は皺み、豊満な艶やかさは見る影もない。安見娘は繰り返した。

「さらに肥え太りたまえ」

冬が訪れ、山が雪に閉ざされ、やがて氷が溶けて春となった。

「宮へ来よ」

冷たく命じ、さっと背を見せた安見娘の後を、見張りの兵は、硬い面持ちで追った。安見娘は、一言も発さぬまま、宮の門前で不意に振り向いた。

じっと頭から爪先まで、確かめるように兵を眺め回し、つと近寄り、股間に手を差し伸べ、鷲掴みにした。

兵は、恐怖に眼を見張った。安見娘は、唇を歪めて微笑み、親指で陽物を刺激しつつ、他の指でふぐりを柔らかく動かした。縮こまっていた陽物は、巧みな愛撫で硬くいきりたった。

「これならば、皇女も満ち足りるであろう」

皇女？

兵は、恐怖と快感の狭間に痺れる脳裡で呟いた。宮に押し込められていたのは、大王の一族なのか……。

安見娘は、急に股間から手を離し、来よ、と笑って再び背を向けた。兵は、惚けたように、後に随った。

宮の、皇女の屋に入った兵は立ちすくんだ。

屋の裡は、梅や馬酔木、福寿草など、さまざまな山の花が足の踏み場もなく敷き詰められ、中央に、薄い巾で僅かに身を覆った、半裸の女が坐していた。

宝皇女は、かつての艶やかさを取り戻していた。ふっくらとした白い頬、唇には厚く紅をさし、白く豊満な四肢が妖しい光を放っていた。

呆然と立っている兵の傍らで微笑んでいた安見娘は、不意に、兵の肩を両手で掴み、その膝を股間に打ち込んだ。兵は呻いて、倒れた。安見娘は素早く、兵を押し倒し、抗う隙も与えず、甲冑を剥ぎ取り、袴を脱がせ、全裸にした。そして、再び柔らかく縮んだ陽物を口に含み、頭を上

下させはじめた。
激痛と快楽が、兵の下半身を包んだ。眼を半ば閉じ、唇を拡げ、ひたすら仰向けに臥したままだった。
宝皇女が、その眼差しを安見娘と兵に向け、立ち上がった。眼を見開き、ゆっくりと歩み寄り、安見娘の傍らに膝を突き、仰向けになった全裸の兵の、たくましい四肢を、舐めるように見つめた。
「先の大王よ」
貌(かお)をあげた安見娘が微笑んだ。
「したまうか？」
宝皇女は頷き、兵の股間に貌を臥せた。

その夜。
見張りの苫屋の隅にしつらえた褥(しとね)で、兵は呆然と暗い天井を見つめていた。
並はずれた精力の二人の女に姦(おか)され、幾度(いくたび)か精を漏らした。彼の股間に跨(またが)り、総身を快楽に振るわせて腰を上下させる女たちを、兵は夢うつつで見上げていた。
安見娘は、皇女を四つん這いにさせ、兵に姦せ、と命じた。兵は命ぜられるまま、犬のように皇女の陰(ほと)に己が陽物を差し込み、腰を前後させた。
皇女の白く肉(ししむら)の豊かに乗った背中が仰け反(の)り、烈しい喘ぎが発せられた。
不意に、皇女が叫んだ。

くらつくり……。
そう聞こえた。その叫びが何を意味するのか分からぬまま、貌を床に押しつけ、腹の底から絞り上げるように慟哭し、また貌を上げ、烈しく振ってわめく皇女に、兵は思わず、身を離した。
「思い出されたもうや！」
傍らで安見娘が叫んだ。眼を見開き、唇が裂けたように拡がり、歓喜の色を満面に浮かべ、両手を握りしめていた。
くらつくり……！
皇女は、歯止めがきかなくなったように暴れ、安見娘にしがみついた。
「汝は行け！」
安見娘は、皇女を抱き締めながら命じた。
「このこと、誰にも言うな。言えば……」
兵は幾度も頷き、這うように、宮を走り出でた。

それから五日目の朝。
日が昇り、褥を這いだした兵が、苫屋を出で、近くの岩場の湧き水で貌を洗い、口を漱(すす)いでいると、麓から登ってくる人影が眼に映じた。
人影が近づいて来るにつれ、兵の貌が強張った。
かの女孺(にょじゅ)……。
かつて、宮を走り出で、押しとどめようとした彼の股間を蹴った、かの女孺。

安見娘と同じように髪を結い上げ、袴をはき、頬や唇に紅を艶やかにさした由良は、上から見おろす兵に気づきもせぬかのように、ぎらぎらと輝く眼をひたすら宮のほうへと向けていた。

傍らを過ぎるとき、かすかに瞳を動かして兵を一瞥した。兵は、蹴られた股間の痛みが蘇り、思わず、脚を閉じた。

由良は、そのまま宮の方へと消えた。

それから、数日おきに、同じ姿の女どもが現れ、そして去り、往来が繁くなっていった。彼女らが、なんのために有馬宮に現れ、そして去っていくのか、兵には見当もつかず、また、探る気にもなれなかった。ただ、なにごとかが動き始めている、という予感だけがあった。それが、生まれた邑で罪を犯し、諸処を流浪するうちに捕らえられ、罪を赦す引き替えに有馬宮の見張りを命ぜられたにすぎない彼にとって、吉か凶か、ただ、不安と恐怖だけが募った。

夏になり、再び苫屋に、安見娘が現れた。命ぜられるままに宮に入ると、色とりどりの花に飾られた屋に椅子がしつえられ、薄衣のみをまとった宝皇女が、数名の女どもを左右に侍らせ、いかめしく坐していた。

兵は、皇女とまぐわうよう命じられた。いずれも若く、美しい女どもの、厚く湿った気に覆われる中、兵は必死で腰を動かした。皇女は、喜悦の叫びを発しながら、兵の奉仕を受けた。もはや皇女は、魂の抜け殻ではなく、意思を持った人として、快を貪った。

そんな日々が続いた。兵は一月に一度、宮に呼ばれて皇女とまぐわった。皇女の様は、その都

度、変わっていた。やがて、たどたどしくも言葉を発するようになった。それは、赤子が童に、やがて乙女へと成長していく様に似ていた。

そしてまた、年が明け、白雉三年となった。

その年の春。

例によって前触れもなく、葛城皇子が飛鳥の河辺宮に、舎人十人を随れて現れた。

「蹴鞠をしようぞ」

馬を下りるなり、そう言い、大海人皇子は苦笑しつつ、舎人どもに蹴鞠の支度を命じた。近くの草原で蹴鞠に興じ、おのおの草に坐して休むうち、葛城皇子は、大海人皇子に歩み寄り、汗を拭いつつ問うた。

「十市皇女は、健やかか？」

大海人皇子は微笑んで頷いた。

「幾つになった」

「五つに」

「五つか。では、讃良は、もう七つというわけだな」

大海人皇子は貌を強張らせた。葛城皇子が、父・蘇我石川麻呂に殉じて死んだ美濃津子に産ませた讃良を、額田郎女が引き取り、十市の邑で育てていることは、公には明かしていなかった。

兄なる皇子は、人を使って己が身の回りを探らせている。

「隠さずともよい」

葛城皇子は、こともなげに言った。
「額田郎女が、吾の血を引く皇女の命を救ってくれたこと、嬉しく思う。汝になついていると聞いたが」
皇子は眼を臥せ、かすかに頷いた。七歳になっても讃良の態度は変わらなかった。額田郎女にも、十市皇女にもなじまず、ひたすら大海人皇子の訪ないを待ち、来れば裾にすがりつき、離そうとはしない。
「汝が妃となせばよい」
葛城皇子は、こともなげに言い放った。
「吾が妃に？」
驚いて貌をあげた大海人皇子に、葛城皇子は声を低めた。
「遠からず、吾等が共に力を合わせ、政事に携わるべき時が来る」
それは……？　問おうとした口を、葛城皇子は手で制した。
「そのために、互いの絆を深めねばなるまい」
言うなり立ち上がり、休み終えて立ち上がり始めた舎人どものほうへ歩み去った。
讃良を妃とすることは、兄なる皇子との絆を深めることになるのか……。大海人皇子は、さあらぬふうを装って立ち上がった。膝がかすかに震えていた。
まぐわいこそ政事……。
蘇我鞍作の声が、皇子の脳裡に蘇った。

その翌日。
大海人皇子は馬を走らせ、十市の邑へ向かった。
門前に、十市の一族の他には、出迎えたのは額田郎女のみだった。
「十市皇女と、讃良は？」
問うと、額田郎女は、笑みを満面に浮かべて言った。
「まずは中へ」
家に入って、大海人皇子は驚いた。
床に、七歳の讃良と、五歳の十市皇女が坐し、十市の女どもの助けを借りて、巾を縫っていた。か細い指で針を動かし、白い巾に赤い紋様を縫いつけている。
「蹴鞠の折りにでも、使いたまえ」
額田郎女は、眼を涙で潤ませていた。
「かの二人が、仲良く巾を縫っているのか」
大海人皇子の声もかすかに震えていた。
二人の女童は、大海人皇子の訪ないも耳に入らないのか、一心に手元を見つめ、縫い続けていた。
讃良は、汝が妃とすればよい……。
ふと、葛城皇子の声が、脳裡に木霊した。針に合わせて動く、讃良の白い腕を見つめつつ、大海人皇子は、やがてまた騒ぎが起こる兆しに、胸が塞がれた。